



11 月学園便り 学校法人小泉学園 東京いずみ幼稚園

理事長・園長 小泉敏男

第2子が損をしないためにも、子育ての基本に留意し、しっかり育てましょう

子育てでも損得について様々声が上がります。今回のテーマ「第2子は損する」は小生の感覚では「損より得」と感じていた。小生が幼少の頃、兄弟姉妹がいる家庭は大半で、「一人しか子供がいない」は少数であった。小生の目には「一人っ子」が羨ましく映ったり、一方勝手な振る舞いに疎ましく思った印象が残っている。「早生まれは、損か得か」の議論は今日でもある。小生は「脳育ち」の見地から生後早い時期に集団・外からの良き脳への刺激吸収が期待できるので、刺激がカリキュラムで裏付けられた「いずみでは早生まれは得」と以前学園便りでも書いた。今回のテーマ「第2子は損する」は、学園便りでも時々紹介する慶應義塾大学中室牧子教授のレポートである。少子化とはいえ、「一人っ子」が少ないは意外と思えたが、本園のご家族の構成からも納得である。小生は園児募集に伴いご両親とお子さんの面談を設けているので、兄弟姉妹の存在からもご両親の子育ての一端に触れるのだが、毎年小生にも興味深いものがある。遺伝子や育つ環境が同じはずの兄弟姉妹でも、同じ人間には育たない事実は不思議ではあるが、この事実は誰もが知る真理である。「子育ては遺伝が優位か、それとも環境か」の議論も小生は環境優位に立つ。幼少期は感覚脳の脳育での時期で、自然に育つものと育たないものがあり、子供の力だけでは育たない。いつまで親の関わり、かつ、どんな関わりが基本かは、親の知恵と実行する環境が関わるので、「我が子が損をしない」ように子育ての基本に留意されて、しっかり環境を整えてお育て願いたい。

第11回 第2子は損をする

慶應義塾大学

総合政策学部教授 中室 牧子

日本では少子化が進んでいますが、実はきょうだいのいる子どもは多いのをご存じでしょうか。厚生労働省が実施している「21世紀出生児縦断調査」で、2001年に生まれた子どもについてみると、(15年後の2016年時点で)約83.0%の子どもにきょうだいがいます。一人っ子という家庭はむしろ少数派で、17.0%にとどまっています。

きょうだいには無視できないような影響があります。

特に、経済学の分野では、「生まれ順」によって、教育効果が異なるのかどうかという研究に注目が集まっています。結論から言いますと、ほとんどの研究が、第一子のほうが、第二子よりも有利になっていることを示しています。こうした研究が発表されるたびに、アメリカのメディアは「第二子の呪い」と呼び、話題にしてみました。しかし、実は第一子と第二子の間に差があるだけでなく、第三子以降もどんどん学歴が下がっていく傾向があります。さらには、生まれ順の効果は、学歴のみならず、成人後の就職や収入にまでも影響しています。生まれ順が後になればなるほどフルタイムで雇用される確率が低く、収入も低くなることもわかっています。イギリス、ノルウェー、アメリカなど複数の国のデータを用いて同じことがわかっているため、第一子が有利なのは特定の国や地域に限った

ことではありません。

実は、どうして第一子が有利になるのかについて、未だ定見が得られている状況ではありません。しかし、いくつかの有力な仮説はあります。

第一に、「親の時間投資」に格差があるという仮説です。多くのデータが、親の時間投資は、生まれ順があとの子どもほど少ない傾向があることを示しています。たとえば、アメリカの生活時間調査のデータで、同じ家庭の中で、第一子と第二子が同じ年齢の時の親の時間投資に差があるかどうかを計算してみると、第一子のほうが平均して1日あたり20～25分も親と長く過ごしていることがわかっています。これを4～13歳の期間に換算すると、第一子と第二子のあいだでは、親と過ごす時間が3000時間近くも異なることになるのです。これには、きょうだいに対する親の時間投資に2つの傾向があることが影響しています。第一に、親が子どもと過ごす時間は、第一子が大きくなるにつれて少なくなるということです。第二に、親はそれぞれの子どもの対して平等に時間を配分しようとするということです。この結果、第二子が第一子の年齢に達した時に、第二子が親と過ごした時間は当時の第一子よりも少なくなってしまうのです。

このように、親が「ある一時点」でそれぞれの子ど

もに対して平等であろうとすると、生涯を通してみれば第一子と過ごす時間が長くなってしまふのは当然のことです。第一子と第二子の格差は、きょうだいの年齢が離れているときほど生じやすいことも、これを裏付けています。

第二に、「非認知能力」に格差が生じているという仮説です。スウェーデンでは、軍隊に入隊する時に心理学の専門家によって30分程度の面談を通して性格診断テストが行われます。この情報を利用して、生まれ順ごとの性格的な傾向の違いを調べた研究があります。この結果、第一子は情緒が安定しており、粘り強く、外交的で、責任感が強く、さまざまな物事においてイニシアチブを握る傾向が強いことが明らかになりました。そして、第一子はリーダーシップをとることが求められる管理職に就く確率も高いことがわかっています。具体的には、第一子は第三子と比較すると、45歳時点で企業の社長になる確率が28%も高いということです。家庭内で弟妹の面倒をみることも多い第一子は、責任感が強くなったり、リーダーシップを発揮する機会が多いでしょうから、それらが社会に出たときに有利に働くというわけです。

第三に、「親のしつけ」に格差があるという仮説です。親は、第一子の成績や行いが悪かった場合に、より厳しくしつけをしたり、見守りの度合いを強めたりします。ただし、それは第一子のためだけではなく、下の子がさぼったり、悪いことをしないよう、「抑止」するためでもあるというのです。アメリカのデータを使った研究では、親が第一子の行動の見守りをしている時間は、下の子どもたちよりも長く、しかも第一子の行動を見守る時間は弟妹が増えるごとに増えていく傾向があることを示しています。しかし、実際に下の子たちの成績や行いが悪かった場合に、親は第一子に対するほどには厳しい態度を取っていないこともわかっています。この結果、しっかりしつけを受けており、日

頃からの見守りの度合いが強い第一子のほうが成績や行動の面で有利になるというわけです。

第四に、第一子と比較して、第二子以降のほうが、予想外の妊娠だったケースが多いために生じたという仮説です。実際に、アメリカのデータでは、第二子以降のほうが、もう1人子どもを産むことを計画していなかった時期に妊娠したと答える人が多く、子どもの教育に対する十分な準備が出来ていなかったことがわかっています。計画外の子どもがいない家庭では、出生順位の影響はほとんど見られていないという点も注目に値します。

それでは子どもは一人っ子のほうがよいのでしょうか。そうとは限りません。1979年から中国で導入された「一人っ子政策」の帰結を分析した研究が、きょうだいがいることにはメリットがあることを明らかにしています。1975～78年のあいだに生まれた子どもと、1979年より後の1980年～83年までの間に生まれた子どもを比較した研究では、一人っ子政策が導入された1979年より後に生まれた子どもの方が、競争心や他人を信頼する気持ちが弱く、リスク回避的な傾向が強いことがわかっています。

第一子が有利になると考えられる4つの仮説は、いずれも親の注意と監視、お金や時間が第一子に多く注がれていることを示唆しています。アメリカのデータを用いて行われた研究は、この格差の始まりはすでに0～3歳の時点で生じており、この格差は小学校に入るまで拡大していくと言います。

生まれ順の格差が特に大きく現れるのは子どもの学力であり、きょうだい間の学力差は「就学前の親の行動や家庭環境で大部分を説明できる」と主張もあるほどです。ですから、生まれ順の格差を恐れて一人っ子を選択するのではなく、下の子が不利にならないような家庭環境にするということのほうが重要ではないかと思えます。